

益田市金山古墳

石で飾られた5世紀の造出し付き円墳

鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター



鳥根県埋蔵文化財調査センターでは、鳥根県古代文化センターの考古資料基礎調査研究・墓制調査の一環として、地域の重要な古墳の調査を実施しています。

益田市内では、平成一九年度に久城町の国指定史跡、スクモ塚古墳の測量調査を実施し、全長一〇mほどの前方後円墳の可能性がわかりました。

平成二二年には、同じ久城町の金山古墳の測量調査を行い、その結果、益田市周辺の古墳文化を解明する上で重要な古墳であることがわかりました。

それを受けて、平成二三年五月に、古墳の形や作られた時期、古墳の作られ方などを明らかにするため、益田市教育委員会、久城伝承文化顕彰会とともに金山古墳の発掘調査を実施しました。

調査によって、これまで内容が知られなかった金山古墳について、多くの事実が明らかとなり、益田平野周辺の古墳のあり方を考える上で重要な資料となりました。

発掘調査にあたっては、久城伝承文化顕彰会、久城町の各自治会の皆様をはじめ、多くの方々にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

金山古墳の位置と調査の経過

金山古墳の位置

金山古墳は、島根県西部、益田市久城町にあります。高津川と益田川によって形作られた益田平野の東岸の台地上に位置していて、樹木がなければ日本海を望むことができます。

この台地上には、島根県内でも最大級の古墳、スクモ塚古墳があります。また、近年の発掘調査で、弥生時代、古墳時代、奈良時代の集落跡なども周辺に見つかってきており、久城町の台地一帯が益田平野周辺地域の中核的な地域の一つであることが明らかになっています。

金山古墳調査のいきさつ

金山古墳は、昭和五〇年編集の『益田市誌』で、その存在が指摘されています。ただ、「半壊」と記されていたこともあって、その後特に注目されることはありませんでした。



金山古墳の位置

平成二二年、地元の久城伝承文化顕彰会のメンバーから、金山古墳は前方後円墳ではないかと相談を受けました。さっそく現地を訪れたところ、半分近くが削られてはいるものの小高い円墳状の高まりがはっきりと確認されました。そしてその南西側に、細長く突き出した部分があることが観察できました。確定はできないものの、前方後円墳の可能性があると考えられました。

古墳の斜面には石が多く見られることから、石が葺かれていた可能性が高いこと、埴輪は見当たらないこともわかりました。県内各地で古墳の基礎調査を実施してきている島根県埋蔵文化財調査センターでは、益田平野周辺の古墳時代を解き明かす重要な古墳と考えて、久城伝承文化顕彰会とともに金山古墳の測量調査を実施することとしました。



測量調査の様子

測量調査の成果

平成二二年度に測量調査を行った成果が以下の測量図です。かなり削られてはいますが、直径一八m、高さ二・五m程度ののはっきりとした丸い高まりがあります。古墳の残りの良い北側を見ると、自然の尾根と古墳の間に浅いくぼみも

あることから、周溝(小規模な堀状のくぼみ)が廻る可能性が高いと考えられました。

円丘部の南西側に細長い長さ五mほどの突き出しがあることが見とれます。前方後円墳か、短い突出部が取りつく「帆立貝式古墳」の可能性が考えられました。ただ古墳の長軸が自然の地形とず

れていることなど、それを否定する材料もありません。結論を出すことは、測量調査だけでは難しいと考えられました。確実なことは、発掘調査を行わないと分からないということです。

発掘調査に向けて

測量調査の成果などをもとに、久城

町の皆さんと相談を重ねたところ、金山古墳の内容をぜひ明らかにしたいという強い思いが寄せられました。そこで島根県埋蔵文化財調査センターでは、益田市教育委員会と相談し、地元とともに発掘調査を実施することとしました。



北側から見た金山古墳



金山古墳の墳丘測量図

金山古墳の発掘調査でわかったこと

古墳の四か所に調査区(トレンチ)を作って発掘を行い、金山古墳の内容を探りました。

高まりの斜面に石が積まれました。

発掘調査してみると、後に壊されたり崩れたりしている部分が多いことがわかりました。しかし残りの良い部分では、斜面に石が積まれていることがわかりました。これを「葺石」と呼びます。人頭大くらいの石を使っている、周りにもたくさん石が散乱していることから、本来古墳の斜面全体を覆っていたと推測されます。



盛土の様子がわかりました。
古墳の高まりのかなりの部分を、土で盛って造っていることがわかりました。周囲を削った土で盛り上げていますが、その時に工夫をしています。粘質の強い細かな粘土、ややさらさらした灰色の土、黒っぽい土を細かく交互に重ねている様子がわかったのです。性質の異なる土を薄く交互に盛ることで、古墳の土が流れ落ちるのを防ごうとしたものと考えられます。また、葺石も土を盛りながら積んでいたことがわかり、土が崩れないための多くの努力をしていたことがわかりました。



周りには溝が廻っていました

古墳の高まりの周りには、測量調査の時から少し窪んでいるのがわかっていました。発掘調査してみると、予想通り、古墳の裾に、底幅が1m程度の溝(周溝)が廻っていることが明らかになりました。

古墳とその周囲との区画を明確にして、聖俗の境をはっきりさせるとともに、古墳の壮観さを強調する役割も果たたかもしれません。

前方後円墳ではなかった

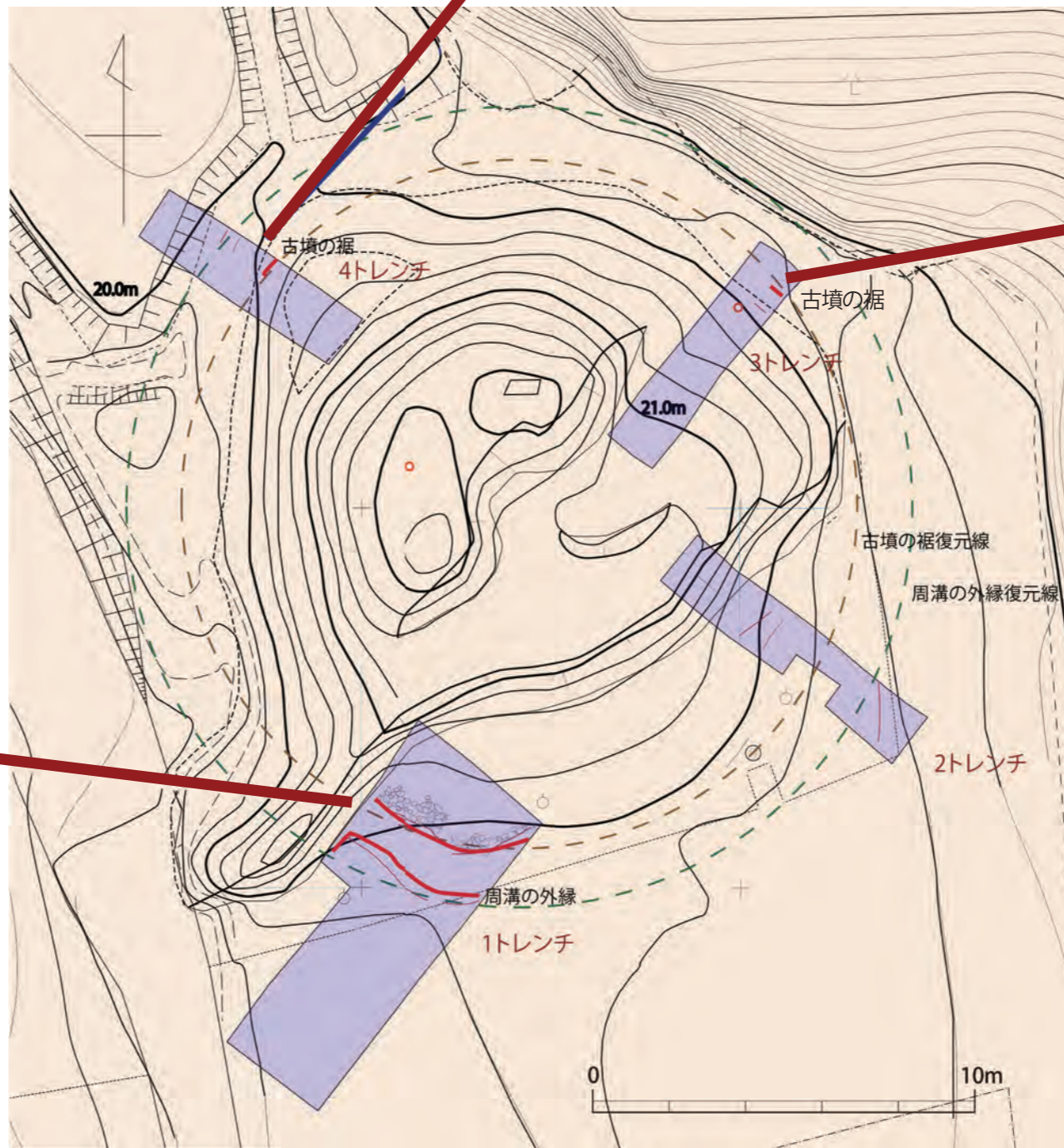
古墳の南西側、突き出した高まりが見られる部分に、1トレンチを作って発掘調査を行いました。この調査区の目的は、何といても金山古墳が前方後円墳であるかどうかを確認することになりました。

ここでは、周りをめぐる溝と葺石が良い状態で見つかりました。測量調査の時に想定された前方後円墳であれば、周溝も裾の葺石も、くびれて曲がっていかなければなりません。ところが、裾の葺石は付き出した高まりの奥に向かって延びていることがわかりました。

しかも、土層を詳しく観察すると、前方部状の高まりは、周溝が埋まった後に盛りあげられていたこともわかりました。つまり、金山古墳は前方後円墳ではなく、円墳の可能性が高いことが明らかになりました。

造出しがっついていたらしい

さて円墳であるとすれば、古墳の裾も周りの溝も丸くおさまるはずですが、ところが、1トレンチの端の方で、周溝の外側の落ち込みが、外側に向かって曲がっていきのがわかりました。前方後円墳ではないのに、なぜ周りの溝が屈曲しているところが見つかったのでしょうか。



金山古墳の墳丘測量図と調査区の配置

古墳の形や規模を知るために、高まりの裾付近、4か所に調査区を作りました。南東側の調査区は後の変更のため古墳の裾を見つけることはできませんでしたが、ほかの3か所では周溝や葺石などの様子が明らかになりました。

い、壇状の高まりが付属していることがあり、造出しと呼ばれている施設で、何らかのまつりの場の可能性が高いと考えられています。見た目で分かる高い突き出しは後の世に付け足されたものでしたが、その下には「造出し」がもうけられていたと推測されるのです。造出しの発見は、金山古墳の評価を考える上で重要な事実となりました。



1トレンチの様子

裾に葺き石が残り、その外に溝が確認されました。溝の中には黒い土がたまっていました。調査の左上の高まりが、前方部に見えた突き出し部です。



溝の外側が曲がる様子

本来そのまま右の壁の奥に続くはずの溝が、調査区の橋で急に曲がっています。右の壁の奥に造出しがある可能性が高いと思われる。

埋葬主体部のヒント

金山古墳は、その多くの部分が削られてしまっているため、豪族が埋葬されていた施設や棺はすでに壊れてしまっている可能性が高いと考えられます。ただ、古墳の頂上の一角に、幅が九〇cmほどの板状の石が顔を出しています。古墳の周りに積まれた石とはまったく異なる石ですので、古墳にかかわる葺石ではない施設の存在が予想されます。その性格を推測する積極的な根拠はありませんが、その大きさや形は石で作った棺（石棺）の蓋石に似ています。頂上にあることも含めて、金山古墳の埋葬主体は箱式石棺と呼ばれるものであった可能性があると考えられます。



溝の底から土器が出土した

古墳の周りを廻っていた溝の底の一角から、ばらばらになった土器が出土して出てきました。土器はひと固まりで潰れたような状態ではなく、甕や高杯などのいくつかの種類が、何の規則性もなく出ています。つまり、わがごとく割られた可能性もあります。古墳の外側で、土器を使って何かのおまつりをした痕跡ではないかと考えています。



土器から古墳が造られた年代が分かる

土器は、その形や作り方などが時代が経つにつれて少しずつ変化をしていきます。考古学では、その変化を読み取り、土器の型式から時代の物差しを作ります。つまり、古墳で使われた土器の型式が分かれば、古墳が造られた時代についてもおよそ見当をつけることができます。

金山古墳の発掘調査のまとめ

古墳の概要

- 金山古墳の発掘調査でわかった内容は以下のとおりです。
- 造出しがついた円墳です。
- 円丘部分は直径が約一八mです。
- 造り出しを加えると二〇mを超える規模となります。
- 古墳の斜面には石を積んでいます。
- 古墳を土をかなり盛って造っています。
- 古墳の周囲には溝をめぐらせています。
- 古墳の溝で土器を使ったまつりがおこなわれていたようです。
- 古墳時代の中ごろ、五世紀の前半ころに作られたものと考えられます。
- 石を使った棺が納められていた可能性があります。

金山古墳とは何なのか

金山古墳は、一言でいえば、五世紀ころに益田平野東側の台地を中心とした地域今の久城町周辺のなかで、大きな力を持った豪族の一人の墓と考えられます。そう考える根拠は次のような点です。

古墳とは全国共通の約束事に基づいて、当時の豪族たちの地位や格式を目に見える形で表したものです。まず二〇mを超える規模は、通常の古墳に比べて大きく、普通に考えて地位なり経済力なりが高かったことが推測されます。また造出しをつけた古墳は普通の円墳よりも格式が高いものであったと考えられます。さらに古墳の斜面を石で飾る葺石も、ある程度の地位以上の古墳で見られることのできなないものなのです。

金山古墳は、残念ながら古墳のかなりの部分が削られてしまっています。また、肝心の埋葬主体や副葬品などの内容もまったく分かっていません。

スクモ塚古墳と金山古墳

しかしながら、調査を行うことで古墳の性格を知るための多くの情報を得ることができました。一つ一つの古墳や遺跡は、どのような状態であっても、地域の歴史を知るための貴重な資産なのです。

金山古墳と同じ久城町の丘陵上には、国指定史跡のスクモ塚古墳があります。スクモ塚古墳は一〇〇mの前方後円墳の可能性が高いと考えられます(五七mの造出し付き円墳という説もあります)。周囲に広い堀が存在した可能性もあります。いずれにしても、石見地方最大級の古墳で、石見西部の広い範囲を治めた豪族の墓と推測されます。

直線距離で約六〇〇mのこの二つの古墳がどういった関係にあるのかは、この地域の古墳時代の様子を知る上で大変重要な事柄です。カギは造られた時期です。二つの古墳は、ともに五世紀ころに作られた古墳と考えられます。しかもどちらかといえばその古い段階にあたる可能性が高いと考えられます。つまり両墳は近い時期に作られたこととなります。

ただ同じ世代の人物の墓だったかどうかはわかりません。また資料が不足しているのです。もし同じ世代の古墳だとすると、金山古墳はスクモ塚古墳に次ぐナンバー２クラスの人物の墓だった可能性が聞かれます。違う世代だとすると、その時代の久城地区のトップの墓だった可能性も出てきます。

このように、古墳の状況を解明することで、当時の社会の構成やあり方を考えることができます。地域が、リーダーの下でまとまっています。やがて郷や郡のような行政区画、引いては石見国の形成を考えるヒントがそこに隠されているともいえます。

金山古墳はいつ削られたのか

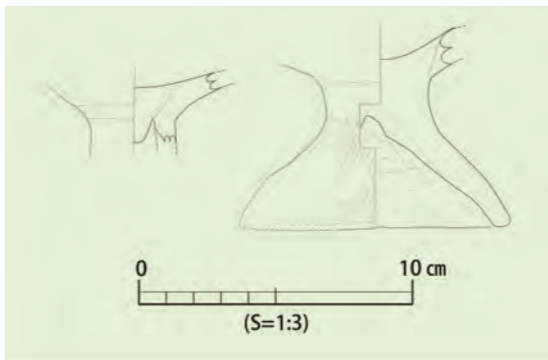
今回の調査で出てきた土器は小さな破片が多く、判断が難しいのですが、土器(古墳時代の素焼きの土器)の高杯から、時代の特徴を読み取ることができそうです。

写真(図面左)の高杯の特徴をみると、古墳時代の中期、五世紀の前半から中頃のものと考えられます。

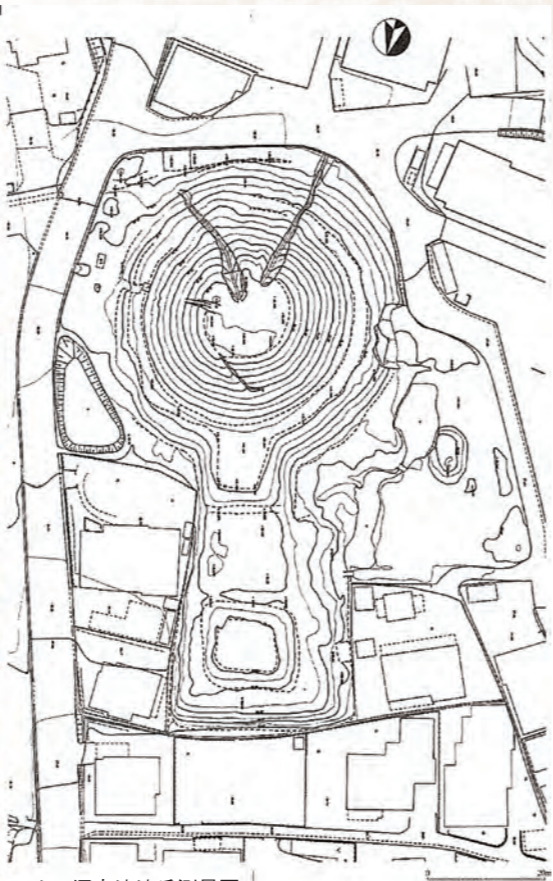
この高杯は古墳が造られたときの溝の底から出てきていますので、古墳が造られた時代と同じ時期のものと考えて問題ないでしょう。つまり金山古墳は、五世紀に築かれた古墳と考えられます。

地元の古老の話によると、このあたりは以前から「うきさあやしき」と呼ばれていたらしく、大きなお屋敷があった可能性があります。古墳の南側には広い平坦面が広がっていることもそれを裏付けます。仮に屋敷があったとすると陶磁器が出た穴は裏庭のゴミ穴だった可能性が高くなります。

金山古墳はもしかしたら、江戸時代ころに屋敷を造るために半分近くが削られ、その土の一部が前方部状の突き出した部分に盛り込まれたのではないのでしょうか。



出土した土器



スクモ塚古墳墳丘測量図



上空から見たスクモ塚古墳

益田の古墳時代と金山古墳

ところで、益田平野周辺には、このほかにも大きな古墳や有力者が葬られたと思われる古墳が多くあります。古いと思われる順に紹介すると、次のようになります。

① 四塚山古墳群

詳細は不明ですが古い中国の鏡が出てきており、4世紀の有力者の古墳だと推測されます。

② 大元1号墳

遠田町の丘の上に作られた全長88mの前方後円墳。島根県でも最大級の古墳で、4世紀終わり頃と考えられます。

③ スクモ塚古墳

前に書いた通りで、5世紀前半の古墳と考えられます。

④ 小丸山古墳

下本郷の丘の上に造られた全長49mで堀や外堤のある古墳。優秀な馬具なども出ています。5世紀末〜6世紀初の古墳です。

⑤ 鵜ノ鼻古墳群

遠田町の海岸ばたに造られた大規模な古墳群で、前方後円墳が4基含まれ、柄頭に金の飾りのついた刀も出ています。6世紀後半〜7世紀の古墳です。

このように、益田には300年余りにわたって有力な古墳が造られ続けています。こうした地域は石見には益田以外に認められません。古墳時代は益田が石見の中心地域だったと言って過言でないでしょう。

金山古墳はこれらの古墳のなかでどういう位置を占めるのでしょうか。スクモ塚古墳と同じ時期なら、首長の補佐役の古墳か？。スクモ塚古墳と小丸山古墳の間に入るとすると、益田の首長墓の可能性もなくありません。今の段階で結論は出せませんが、今後の古墳時代を考える上で重要なデータを提供することになりました。

ところでこれらの古墳は、なぜか益田平野の東側丘陵に集中しています。古くから開発が進んでいた益田市街地あたりには大きな古墳はないのです。これは、当時陸化しつつあった益田川・高津川下流の「古益田湖」の陸化と開発の進行と関わりがあるのではないのでしょうか。新しい耕作地が広がる益田平野下流域を押さえることが、益田を納める重要なことだったのかもしれない。

金山古墳の位置と周辺の関連遺跡

